國學院大學学術情報リポジトリ

国学研究プラットフォーム公開レクチャー：坂東洋介氏「本居宣長と和辻哲郎　カミ観念と神話解釈をめぐって」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000615

国学研究プラットフォーム公開レクチャー
板東洋介氏「本居宣長と和辻哲郎　カミ観念と神話解釈をめぐって」

日本文化研究所では2018年度より、「国学研究のネットワークの拡張」を目標に「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」を開催してきた。本年度の公開レクチャーは2022年２月19日に開催し、国学・儒学・武士道などを日本倫理思想史の観点から研究している板東洋介氏（筑波大学）に、「本居宣長と和辻哲郎　カミ観念と神話解釈をめぐって」というテーマでお話しいただいた。司会は武田幸也氏が務め、はじめに本プロジェクト代表の松本久史氏が挨拶を行った。

以下、板東氏によるスライドの構成に沿う形でレクチャーの内容を紹介する。本トピックの見出しはスライドに準拠する。

自己紹介

板東氏は東大の哲学専修課程でハイデガーについて卒論を書いたのち、修士から博士にかけては和辻哲郎の系譜を引く倫理学専門分野において日本倫理思想史を専攻した。

近世中期（18世紀）の思想史を探求した単著『徂徠学派から国学へ』を経て、近年は、18世紀日本に共通する思想的な構え･経験が、どのように近現代へ接続／忘却されたのか、という点に関心の軸足が移ってきたという。

「十八世紀の経験」：近世から近代へ

17世紀における神儒仏（儒仏道）三教の唯心論的合理化に対し、18世紀の国学・古文辞学・仏教（さらには清朝考証学など東アジア全体の同時代思想）は、自己とは断絶した経典の絶対性を復活させ、他者たる開祖の言葉によって実証的に学ぶことをトレンドとした。

しかし、19世紀から20世紀の初めに西洋の知が入ってくると、18世紀の知は進んだ西洋に対する遅れた東洋として否定的に見直されたのち､「東洋哲学」として再編成されていく。では､その過程で取り落とされたものは何か。仏教・儒教に比べ、神道はどうか。

宣長と和辻：深い連関

近世の宣長を継承しようという意識を有していたのが近代の和辻である。「もののあはれ」論では､坪内逍遥が提起したようなヒューマニズム的な宣長理解を批判し､「永遠の根源への思慕」というロマン主義的な再解釈を行った。記紀による古代神話研究や、日本なるものへの解釈学的な関心を有した点も連関する。ただし仏教や儒教に対する態度は異なっており、和辻は宣長を乗り越えようとしていた。

「哲学」化の体現者としての和辻

和辻は、18世紀的な経験を「哲学」に再編成する動きの中心的なエージェントだった。その研究対象は広いが､「教」的な要素を排除し､「哲学」として再構成するやり口が共通する。仏教については大乗非仏説を前提とし、後代の人々による「ロゴスの自己展開」

に汲むべき真理を見出した。儒教の孔子や『論語』も同じ論法で扱っている。

そして神道の『古事記』からもカミを追い出し、空虚な「全体性の権威」の表象とした。

和辻の宣長へのあきたらなさ：学としての再構築

和辻は宣長の「弱点」が『古事記』の道を実証しながらも論理的に把捉せずただ信仰したことにあると繰り返し述べており、これは村岡典嗣に由来する見解だった。

その上で和辻は、自分が宣長を反復しているという自覚のもと、宣長が『古事記』から取り出したものを分析しようとした。それはカミではなく、天皇の尊貴性がどこに由来するのかという点である。宣長が『古事記』における神代の事実を信じることを求めたのに対し、和辻の場合は哲学・倫理学・宗教社会学的にその原理を把握しようとした。

しかし、和辻は宣長におけるカミの最も重要な論点を捉え損ねているのではないか。

宣長のカミ：畏るべき他者

宣長は、西洋哲学の他者論にも近い畏るべき他者としてカミを捉えた。人間側の解釈枠組みによって完全に善なる存在と信じられる仏や聖人と異なり、カミは予測不可能な隣人的なものであり、本質的に善悪を持たない。ゆえに神話も善の実現過程たりえず、人間には原理を把捉しきれない奇しさを有する。

宣長の見た神話の構造：世界の脆弱性

宣長において、神話世界と、それを起源とする我々の現世は脆弱なものと理解されている。天孫降臨を重視した従来の儒家神道などと異なり、イザナミの死を特権的な時点と見るべく神話解釈上の操作を行い、高天原／黄泉国、祓／穢という二元論を無理やり提示し、多くの論者から批判されたのである。宣長は、荻生徂徠における理解不能なものとしての経典観と共通する形で、神話と世界の根本的な他者性を読み出そうとしていた。

和辻における自然：風土

個的な人間の外側に客観としての自然を位置づける近代の主観―客観モデルに対し、和辻の『風土』はドイツ現象学によってその超克を図り、人間が文化として有する共同志向のなかで自然を論じた。つまり、人間に了解不可能な外部の自然を認めない点で、理知の外にカミを求めた宣長とは分かれてくる。

和辻におけるカミ：全体性の通路

和辻の『日本倫理思想史』によれば、カミは祭祀を行う共同体の民意を反映した虚焦点であり、人間の外にある何者かの意志が現れるわけではない。この議論は『風土』の自然理解を前提としており、社会的には民本主義・天皇機関説や象徴天皇制につながる。

和辻はある種の祭りを分析しえているが、それは頽落した慣例としての祭りであり、宣長が捉えたカミへの畏れを取り落とし、18世紀的な経典の絶対性を無化するものだった。

以上の報告を受けて質疑応答が行われた。

まず林淳氏が、和辻に対するデュルケームの影響や“国家神道”における外面性との類似を質問し、板東氏はフランス社会学派や国民道徳論・水戸学・儒教などに触れた。

次に、司会の指名により鈴木正崇氏が発言し、和辻の現世主義と平田篤胤の他界性を対比したほか、和辻における天照大神の消去や宣長との共通点についてコメントした。

続いて三ツ松誠氏が、宣長自身は世界を脆弱だと思っていなかったのではないかと問い、宣長の生活感覚について応答があった。

他にフロアからは宣長と和辻の共通性に関する質問があり、板東氏は和辻における人倫の神聖性という観点に言及した。今回は50人前後が参加する盛会となった。（木村悠之介）